

| | |
|--------------|---|
| <p>研究代表者</p> | <p>所属学系・職名 人間・生活学系・准教授 氏名 高橋 純一</p> |
| <p>研究課題</p> | <p>自閉症幼児に対する肯定的捉え直しが家族の養育スタイル変容に及ぼす影響 Effects of affirmative viewpoint of children's behavior on child-care styles in parents who have a child with developmental disorders</p> |
| <p>成果の概要</p> | <p>1. 目的 障害児の家族は、養育においてストレスに晒されることが多い。そのような状態では、ネガティブな養育スタイルが先行してしまい、子どもの発達に影響を及ぼす。養育スタイルの変容には、ペアレント・トレーニングが有効である。ペアレント・トレーニングの効果の1つとして、子どもの行動に対する捉え直しがある（佐藤・他, 2010）。特に、肯定的な捉え直しは保護者のストレス状態を軽減する効果をもつ（井上・他, 2014）。 本研究では、子どもに対する肯定的捉え直しに着目し、ペアレント・トレーニングを実施する。その上で、養育スタイルの変容に関して、量的観点から客観的なデータを提供する。</p> <p>2. 方法 <調査参加者> 福島大学発達障害児早期支援研究所において実施している「つばさ教室」に参加した子ども（4歳～6歳）の保護者9名（男性1名、女性8名；年齢は全員が30歳代～40歳代に該当した）であった。調査対象者の9名のうち3名は2016年度の新規参加者であった。残りの6名は2015年度の参加者であり、予備調査として実施した対象者であった。両年度の実施内容は2015年度（予備調査）および2016年度（本調査）ともに同じであったため、分析は両年度を合わせて行った。</p> <p><質問紙> 保護者の養育スタイルを測定する尺度として、「養育スタイル質問紙（松岡・他, 2011）」を用いた。養育スタイル尺度は27項目から構成されており、5因子構造（肯定的働きかけ、相談・つきそい、叱責、育てにくさ、対応の難しさ）である。回答は、「全く当てはまらない（1点）」「当てはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「当てはまる（4点）」「とても当てはまる（5点）」の5件法であった。質問項目には、例えば、“私の子どもががんばっているところ（努力しているところ）が具体的に10個程度あげることができる（肯定的働きかけ因子）”、“子育てで困ったときは、自分の配偶者や親に相談している（相談・つきそい因子）”、“子どもが言うことを聞かない場合、おどかしたりするような強い厳しい叱り方をする（叱責因子）”、“私の子どもは、育てにくい子どもだったと思う（育てにくさ因子）”、“この頃、子どもが親の言うことを聞かなくなってきた（対応の難しさ因子）”などが含まれた。</p> <p><手続き> 「つばさ教室」は、2016年5月を初回として、2016年12月まで計14回行った。「つばさ教室」の開始時（5月）および終了時（12月）に、保護者に対して「養育スタイル質問紙」を実施した。また各回の親教室において、つばさ教室における療育場面を観察し、子どもの良い（肯定的）行動について自由記述を実施</p> |

成果の概要

した。

3. 結果と考察

対象者9名のうち、障害傾向が弱いものの、保護者どうしの子育てに関する相談の場としてつばさ教室を利用したいという意志で参加した1名を除き、8名で分析を実施した。

<養育スタイル尺度の変容>

保護者の養育スタイルの変化について検討するため、支援前後で養育スタイル尺度質問紙における各因子の得点を比較した(表1)。各因子で、支援前後[支援前 vs. 支援後]を変数とした対応のあるt検定を実施したところ、「肯定的働きかけ因子」においてのみ有意差が得られた [$t(7) = -3.00, p < 0.05$]。支援後の方が支援前よりも得点が高かった。

表1. 養育スタイル尺度の支援前後における変化

| | 肯定的働きかけ | 相談・つきそい | 叱責 | 育てにくさ | 対応の難しさ |
|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 支援前 | 3.24 (0.34) | 3.20 (0.10) | 3.50 (0.63) | 3.00 (0.89) | 3.29 (0.52) |
| 支援後 | 3.40 (0.41) | 3.13 (0.13) | 3.53 (0.79) | 3.00 (0.04) | 3.42 (0.56) |

※ 各因子における調査対象者 (n=8) の評定平均値 (標準偏差) を示す

高橋・遊佐・鶴巻 (2016) から抜粋

<養育スタイル尺度の変容>

次に、自由記述データから養育スタイルの変容過程を検討するため、テキスト分析を行った。まず、調査対象者8名における第1回から第5回までの自由記述をテキストデータ化した。次に、解析対象の構成要素を整理するため、同種の語を1つの語に置換した。以上の手続きを実施したテキストデータに対して、テキストマイニングを実施した。

主成分分析から4成分が抽出された。これらの主成分行列を用いて(主成分行列を変数に設定し、主成分行列の項目をケースに設定した)、クラスター分析を行った。距離15に基づいてクラスターを判断したところ、3つのクラスターが認められた。第1クラスターは「自己の活動」とした(例: “先生の指示が伝わっていた”)。第2クラスターは「他者との相互作用」とした(例: “友達や先生との関係構築ができた”)。第3クラスターは「出来事(道具)」とした(例: “ダンスを楽しそうにしていた”)。これらのクラスターをもとにして各回の自由記述データを分析したところ、前半では「自己の活動」に関する記述が多いものの、後半では「他者との相互作用」に関する記述が増加した。

4. まとめ

本研究から、つばさ教室におけるペアレント・トレーニングの有効性が実証された。特に、子どもの行動を肯定的に見ることで、養育スタイルがポジティブに変容することが明らかとなった。その背景要因として、保護者の子どもに対する見方が、子ども自身の行動や反応だけでなく他者との相互作用にまで視点の広がりを見せたことが影響したと推測できる。

5. 文献

高橋純一・遊佐千尋・鶴巻正子 (2016) 子どもの行動に対する肯定的捉え直しが発達障害幼児の保護者の養育スタイルに及ぼす影響, 障害理解研究, 17, 17-28.